20210321レムナント教会1部

**荒野の正体2(霊的状態) (申命記8:11-20)**

　人は誰しもが楽に生きたいという願いを持っています。それは信者でも例外ではなさそうです。信者の祈りのほとんども結局「険しい世の中で楽になれるように」という願いがほとんどではないでしょうか。しかし、聖書を見ますと、神様は信者の願いを聞いて叶えられる神様ではないと記されています。とても残念でしょうけれども。神様は信者の願いに答えられる方ではなく、信者に対する神様ご自身の願いがあり、それを全うされるお方なのです。ここが正しく理解できていないと信仰生活が長くなっていてもなかなか葛藤から抜け出すことができなくなってしまいます。そういうことで、信者の願いとは裏腹にむしろ苦難の道、試練の道へと導かれるときがしばしばあります。イスラエルが出エジプトした後、言うまでもなく楽な生活を夢見ていました。にもかかわらず、神様は試練の荒野へと導かれたということを先週も確認しました。その荒野の正体についてもう少しお話が必要かなと思い、今日は「荒野の正体２」というタイトルでお話をしたいと思います。

　イスラエルが楽なことを願っていたのに、なぜ試練の荒野を通るようになったのか。神様はなぜ私たちのレベルから見たときにはいじわるなようなことをされるのか。それは先ほども申し上げましたように、信者の私たちに対する神様の願いを全うするためなのです。それが荒野の正体です。荒野そのものは険しくて厳しいし嫌になるかもしれません。しかし、その本当の裏側、正体というものは、信者の私たちに対する神様の願いを全うするところにあるということを忘れないようにしてください。そういう意味で今日の聖書にも書いてある通りに、試練の荒野というところは、「人生の勝利の最も重要な鍵は信者の霊的状態にある」ということを教えるための訓練場です。これが荒野の正体です。ここで私たちは素直に荒野での出来事について確認する必要があります。まず最初に先々週も申し上げましたように、イスラエルが出エジプトした後、紅海という不可能な壁にぶつかるようになりました。その紅海が私たちを殺すようなものだと皆思っていたわけです。しかし、素直に正直に結果が分かっているので、その紅海が問題だったでしょうか。イスラエルがあれほど騒いでいた紅海が本当に問題だったでしょうか。その紅海をかわいた地のように渡って、結局盛大にハレルヤと賛美を捧げたのではないでしょうか。その後、食べ物や飲み物に困る状況に遭遇するようになります。今の言葉で申し上げると生計の問題、経済的な問題にぶつかりました。それでまたイスラエルの人々が不平不満に走り大騒ぎをすることになります。本当に経済的な問題がやってきたときに食べ物、飲み物に困ること、それが問題だったでしょうか。神様は今日の聖書でも改めておっしゃっているように、マナを与えられ、また小鳥を持ってきて彼らを十分に食べさせられたわけです。なのでそれも決して問題ではなかったということが確認できるのではないでしょうか。そして、砂漠というところは夜の気温は氷点下以下になり、昼間は40℃以上になるような気温差がある、人が普通に生きることができない状況なのです。その寒さと暑さには人間は耐えられません。それも問題だったでしょうか。神様は炎の柱、雲の柱によって、イスラエルをしっかりとガイドして守っていらっしゃいました。

　今日の聖書にはこういうことも書いてあります。15節には「燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわききった地を通らせ」という表現があります。それが荒野というところです。何一つ好ましいものはありません。楽を願っている皆が嫌がることばかりなのです。それでそのさそりや蛇などかわいた地などが問題だったのでしょうか。神様は服一着で足も腫れることがないように、40年間何も問題がないようにイスラエルを守り導かれたということを私たちは知っています。ですから、普通にイスラエルが、また私たちが問題だと思っていることは、本当は問題ではなかったわけです。何が問題だったでしょうか。なぜイスラエルがその前でそれほど大騒ぎをして不平不満に走って神様を怒らせることになってしまったでしょうか。それは紅海や荒野が問題ではなくて、そこを通っている信者のイスラエルが問題だったわけです。なぜイスラエルは結局何も問題ではないのに問題だと思い込み大騒ぎになり、神を怒らせることになったのでしょうか。それがイスラエルの霊的な状態なのです。関係がどうのこうのではなくて、そこを通る信者の霊的な状態によってそのすべてが問題になるときも問題にならないことも、というように分かれるようになります。イスラエルは出エジプトしたのにもかかわらず、エジプトでの奴隷の習性そのまま持っていました。自分中心、肉が中心であり、この世が中心であり、神様を意識していません。神を頼り、神を信じる信仰などはまだ慣れていない状態なのです。なのでこのような霊的な状態の場合は、いつも条件がどうなのか、関係が良いか悪いか、状況が有利なのか不利なのか、などをいつも勝利の鍵だと思うのです。そこに人生の勝利の鍵が入っていると皆思い込んでいるわけです。その結果、人生の歩みにおいて自分が願ってもないこと、予想だにしていないいろいろなことが起きた場合には必ず揺れるようになります。必ずふらふらがっかりダウンするしかありません。条件や状況、環境に人生の勝利の鍵があると信じ込んでいるわけですから。そして、その状況を打破するために暴れるしかありません。あがきをするしかありません。それゆえ人生そのものが揺れるか、暴れるか、どちらか一つになるしかないし、その中で生き残るためには競争するような疲れる人生を送るようになるしかありません。なぜなのでしょうか。霊的な状態がそのような状態なので、人生の勝利の鍵が別のところにあると思うわけです。人生の勝利の鍵はあなたがたが思っているそういうところにあるものではありません。荒野を通らせることによって人の、つまり信者の霊的な状態に鍵があるのです。なので条件、状況云々、そこがああだ、こうだとつぶやく前に、霊的な状態にフォーカスを合わせるべきなのです。これがこれからの人生を勝利者として歩んでいくための一番大切な要素になるのだと教えられたわけです。荒野を通らせることによってそれが学習できるようになったということを覚えていただきましょう。ですから、信者が自分の霊的な状態がしっかり整えられるようになれば、どのような荒野であっても、どんな状況であろうが、一切それを問題にしません。その問題に十分打ち勝って勝利するようになります。

　例えばヨセフの場合は、皆さんご存知のように家庭環境がものすごく険しい状況でした。兄弟に憎まれ、結局は人身売買犯に売られるような状況だったわけです。小さい頃に母親が病気で早く死んでしまいました。そのような状況を考えたときに、私も小さい頃母親が早く亡くなって、母親のいない生活をずっとしてきました。それがいつも自分にはネックであり、自分の問題だと思っていたのです。なのでいつもそれによって影響を受けて左右されるようになります。そのとき私は信者ではなかったので。しかし、信者であっても霊的な状態が未信者と同じ状態であれば、そのすべてが問題になります。しかし、ヨセフは主がいつもヨセフとともにおられるということが分かっていたので、そのような家庭環境だったにもかかわらず、一切それを問題にすることがありませんでした。そこにある神の導きに従う勝利者となったということを私たちは知っています。もう一人申し上げますと、ダビデもそういう人間でしょう。死の影の谷を歩くと表現するしかない辛い時期を送っていたのにもかかわらず、それを一切問題と思いませんでした。主は私の牧場の羊飼いであり、私には乏しいことがありません。それがホテルのベットで横になりながら言ったことではありません。死の影の谷を歩きながら、しかし、私にそれは問題ではありません。主が私の羊飼いなので。人生の勝利の鍵は信者の霊的な状態にあります。優先課題、一番先にフォーカスを合わせるべきところは、環境を整えて周りを変えることではありません。子どもが親が旦那さんが奥さんが変わることではなくて、自分の霊的な状態を改善すること、それが一番のポイントになります。荒野を通らせることによって神様はイスラエルの民にそれを教えようとしていらっしゃいました。イスラエルが見たときには、一瞬試練のように思われるでしょうけれども、その荒野の正体はここにあったわけです。人生の勝利の鍵は自分の霊的な状態にあるのです。なぜなのでしょうか。この世界は人間が動かしているものではありません。この世界を造られて神様が動かしていらっしゃるわけですから、私たちに求められることはしっかりとした霊的な状態です。なので試練の荒野を通して、神様は信者の霊的な状態を現すことによってサミットの霊的な状態として引き上げることをなさいます。これが試練の荒野の正体です。ただ辛い、ただなんで私にこういうことがあるのかとつぶやく材料ではありません。信者はそんなに単細胞のような存在ではありません。試練の荒野は一見辛くて痛いときもあるでしょうけれども、それは神様が私の霊的な状態をサミットの方に引き上げようとして許されたものなのです。これが荒野の正体です。自分ではなくて、自分がどうのこうのではなくて、キリストに視線を集中してもらうために荒野を通らせます。荒野を通るときに自分がどれほど無力で、自分がどれほどいらない存在なのか、自分のどうのこうの、自我というものは本当に邪魔になるだけであって頼りにならないものなのだねということをしっかり学習するようになります。なので弱い自分がそこにいるでしょうけれども、その自分ではなくて、とにかく歯を食いしばってでもキリストを見上げ、キリストに集中させること、これをOnlyキリストと言います。今までは誰かのせい、環境のせいと言い訳ばかり言うしかありませんでした。言い訳には全部それなりの理由があります。にもかかわらず、その言い訳が無駄なものであることを分かって、それを全部捨ててキリストに集中させる。これが荒野の目的なのです。言い訳などは何の役にも立ちません。しかし、私たちはそうするしかありません。なのでそれがいらないものだということを学習し全部捨てて、理論的に世の法則によって論理的にどうのこうのなど分かりませんけれども、とにかく全部塞いでキリストに集中する。荒野を通る場合にはそうなるしかありません。今までの自分の良心や道徳的な計算や法則などなどが一切通用しないし、それは私にプレッシャーになるだけなのです。そのすべてを振り払ってキリストに集中することです。これが荒野の正体です。

　そして、そのキリストにあって今現在、弱さを抱えて様々な失敗があるかもしれません。今痛い目に遭っているかもしれませんけれども、自分は天にある霊的すべての祝福をいただいている幸いな者、幸せな者なのだ。それを告白するためなのです。条件、状況によって自分の幸せを天秤にかけるような人生を終えて、キリスト・イエスにあってキリスト・イエスだけを根拠にして、私は幸いな者なのです。どれほど神に祝福された幸いな者なのかと言いますと、ローマ8：31には、私たちはなかなか理解できないでしょうけれども、すべての罪が終わって神様に喜んで受け入れられて義と認められて、「おまえは合格なのだよ。おまえはわたしのものなのだよ」だけではなくて、栄光に富んだものになったと言われています。天にある霊的すべての祝福をいただいて、肉体的にいろいろなことがあるでしょうけれども、私はキリストと似た者であり、私を通してキリストが現れる不思議な存在に造り変えられているわけです。皆さんのどうのこうのによってこれを疑ってはいけません。それとこれとは全く関係ありません。キリストの血潮によってそのようになりました。神様によって造られた自分、両親によって生まれた自分ではなくて、アダムのDNAを持っている自分ではなくて、イエスの血潮によってイエス・キリストのDNAをいただいている自分、誰も奪うことができない、また変えることもできない永遠のいのち、神の祝福をいただいている者です。尊い存在に造り変えられました。

　そして、私たちが改めて確信しないといけないのは、ローマ8：39にあるように、このような新しい自分、祝福の自分は、どんな被造物の何があっても変えることができません。奪うことができません。たとえ皆さんが過ちを犯したとしてもキリストの血によって新しく造られた自分はそこにダメージを受けることなどはありません。これが不思議な福音というものなのです。それどころかローマ8：37、すべてに圧倒的な勝利者となります。患難があり、困難があり、迫害があり、危険がやってきて、剣で脅かされることがあったり、食べられなくて飢え死になりそうな状況であっても、そのすべてに圧倒的に勝利できる存在であるし、それだけではなくてローマ8：28、すべてを働かせて益となｒいます。単なる勝利ではありません。私たちの失敗でさえ、世の攻撃でさえ、サタンのしわざでさえ、全部ひっくり返して益とさせる、その神の御手に捕らわれている存在なのです。自分はそのような存在なのだと気づいてもらって、集中してもらうために荒野を許されました。先週も申し上げましたように、最終的にパウロのように私を強くしてくださる方にあってできないことは何もないのです。私はどんな境遇になっても、どんな場合でも大丈夫なんだ。これは私は何でもできるよという積極的な思想ではありません。逆です。お腹がすくことも私は可能です。迫害を受けて病気になることも、私は十分できます。そういう人をサミットと言います。だから、この世の人の手に負えない者と見られる存在にすでになりました。これからは確認して、それを自分自身に言い聞かせることをしないといけません。イエス様と初代教会がオリーブ山で集会をして、そこで結論付けたことがあります。使徒1：1、イエスはキリスト、すべてを終わった。そのイエス・キリストにあって私たちは幸いな者。希望にあふれる者、保証された者なのだと。違う存在です。なので1：3、この地上を歩く理由、課題は、世の国がテーマではなくて、神の国のために生きる者なのです。そして、自分の力と環境、状況、どうのこうのと一切関係なく、聖霊の力によって私たちは世界福音化を全うする存在なのです。これが分かって、これを信じる信仰を持つときに、その人の霊的な状態はサミットになります。なので不可能な状況、迫害の状況であるにもかかわらず、1：14、祈りに専念します。その祈りに専念する前に、それはあなたがたは知らなくてもいいよと言われたことがあります。何も問題にならない。何ものにも引っかかることがない。それがサミットです。あなたがたは知らなくてもいいよと言われた者は、全部下ろして計算せずに祈りに専念します。これがサミットの霊的状態です。私は幸いな者なのです。なぜそう言えるのか。今現在、周りのパリサイ人の方がずっと立派だし、金持ちだし、裕福に暮らして権力も持っていて、それなのに乞食みたいな売春婦や取税人ばかり集まっている集団の何が幸いなのか。分かりません。キリストによって。Onlyキリスト。天にある霊的すべての祝福をいただいているので。母親がいるかいないか、孤児なのか、両親が元気で生きているか。そういうことは知らなくていいのです。そういうことは私と関係ありません。そういうこととは一切関係なく、私は幸いな者。私は天にある霊的すべての祝福をいただいて、私は地上にいる間にキリストのいのちが私を通してあふれ出る者、結局天の御国に受け入れられるように保証されている者、幸いな者です。自分自身のことをそのようにしっかりと信じて正しく思うこと、これが霊的なサミットの状態です。そうするとその人は無理やり言われてではなくて 、自分はこの地上にいる間は他の人と違う存在として教会として生きていく、つまり灯台として、世の光としてこの地上の人生を歩く者なのだということが明確にわかるようになります。どれほど信仰生活をしていたのか、どれほどのレベルなのかということは一切関係ありません。存在そのものがそのように造り変えられているので、これを確信することをサミットの状態と言います。だから、誰かに言われて祈るでしょうけれども、誰かに言われてではなくて、誰かに言われることによってただ確認するだけなのです。だから、私は自分の今の現場に光を照らし、47都道府県に光を照らし、一千大学に光を照らし、237国、五千部族に宣教を通して光を放つために生きる者だということを疑わないわけです。なぜならサミットなので。自分のどうのこうのと関係ありません。皆さんの内側にイエスの霊が宿るから、キリストが皆さんの内側にともに宿っていらっしゃるわけですから。だから、皆さんは根っこから、根底から造り変えられている存在です。それに気づいて、それを喜ぶことをサミットと言います。だから、あなたがたは知らなくてもいいよ。それらのことは心配しなくてもいいよ。何も思い煩わないようにと言われる存在になったということを確認してください。試練の荒野というものは、信者の私たちをこのようなサミットの霊的な状態に引き上げるために神様が許されたものです。これが荒野の正体だということを改めて確認して、人それぞれレベルや程度などいろいろ違うでしょうけれども、もし皆さんの前に試練だと思われる荒野がやってきたときには、余計な戦いをせずに、自分の霊的な状態を改善すること、そこにすべてのフォーカスを合わせるようにしましょう。誰かが悪い、良い、これが正しいか正しくないかという戦いは無駄なものになります。正しいか正しくないかを知らなくてもいいという無知な話ではありません。でも、正しくても正しくなくてもそれが勝利の鍵ではありません。霊的な状態であれば、100％間違っている世界であっても勝利できるはずなのです。なのにこの正体が分かっていないのでフォーカスが霊的な状態の改善の方に行かないで、余計な戦いの方に引っ張られてしまうのです。だから、その人がそうしたから、環境がこうだから、こっちが悪いのではないのか、私がどうして、だから私はダメなのです...というような戦いばかりなのです。いつこれが終わるのだろう、どうしたら突破できるかということばかり悩むでしょう。一切いりません。放っておいていいのでしょうか。イエス様が放っておいていいよとおっしゃったわけです。ただ何もせずに放っておくわけではありません。霊的な状態にフォーカスを合わせて、余計な違う戦いは避けるその時に、私たちは神の勝利を、イエスの勝利を必ず見るようになります。これが信者の歩みというものです。

　そういう意味で、柳先生のメッセージにもありましたように、このサミットの状態のために私たちが参考にしないといけないことがります。参考というのはただの参考ではなくて、根拠にしないといけないものであり、それが聖書です。この申命記もモーセが書きました。創世記から申命記までモーセが荒野のときに書いたというのが有力な説です。そこでモーセが荒野を通りながら書いた創世記から申命記までがサミットの状態のための答えになるということを覚えていてください。人生の答えは創世記3：15、Onlyなんだという明確なメッセージです。出エジプトはそのOnlyイエスの中で完璧に解放されていやしの祝福がそこにあるよということなのです。そして、解放されていやされた人々の一番集中すべき内容が何かというとレビ記、キリストに集中しなさいということです。朝も昼も、今日も明日も羊の血の匂いがプンプンする内容がレビ記です。キリストに集中すること、言葉を変えますと礼拝を中心にするということがサミットの状態を維持するために大切なポイントになります。そうするとついてくる話でしょうけれども、民数記は使命を確認することなのです。生きる理由は何なのか。数を数えたということはそういう意味なのです。理由があって召された尊い存在なのです。申命記はこういった内容をもって、これがすべて神のみことばに書かれているものなので、みことばが刻印されていうように、つまり、サミットになってサミットとして勝利する方法中の方法は神のみことばなのです。こういったことがモーセが書いたモーセ五書と言われるものによく紹介されているのです。改めて神様が荒野を通らせることによって信者の私たちの霊的な状態をサミットの方に引き上げようとしているという正体が分かったならば、このモーセ五書のメッセージをしっかり取り入れて参考にしていきたいと願います。

　神様は今も休むことなく、信者の皆さんひとりひとりをサミットの方に引き上げようとして動いて働いていらっしゃることを私は信じております。それが皆さんひとりひとりにどのような形として現れているのか、それは人それぞれです。しかし、神様は正確に神の願いを、私たちに最高になる神の願いを私たちに全うされる方であり、今それを全うしていらっしゃることを覚えて、改めて集中の恵みに預かることを祈りたいと思います。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。ありがとうございます。私たちはただの試練、嫌だと思うようなその荒野を神様は許されることによって、神の願いを私たちに全うされると確認しました。霊的な状態に鍵があり、だからこそ私たちの霊的な状態をサミットに引き上げようとして許されたことであり、神様の訓練場であることを確認してつまずくことなく、またつぶやかずに落胆せずに霊的な状態にフォーカスを合わせ、キリストに集中できるようにひとりひとりを祝福してください。そこにある自分の頑張りではなくて、ヤーウェの勝利、イエスの勝利をひとりひとりが見ることができるように導いてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン